

「：明日？」

「ああ、それで軍議も長引いた」

「じゃあ、支度しない」と

「おい、花？」

そう言つて、膝から降りようとする花を阻止するよ

うに、玄徳は腰に回した腕の力を強めた。

「だつて、明日早いなら色々準備が必要でしょう？」

「：そんな事は他の奴にやらせればいい」

「でも：」

まだ膝から降りようと、もがいている花の耳元に玄

徳が顔を寄せる。

「：明日からしばらく離れ離れになってしまうのを、

寂しく思っているのは俺だけか？」

「：！！」

拗ねたような声音が耳朶を打つ。その声音にある種

の色が滲んでいる様な気がするの、きつともう気の

せいではない。

「：玄徳さん」

玄徳の胸元辺りの衣をきゅつと握つて頬を寄せる。

寂しいと思つているのは勿論同じだ。ただ、そんな事

で玄徳の手を煩わせたくないと思つている自分もい

る。

「：花？」

「寂しい：です、だつて玄徳さんは只でさえ忙しくて、

ゆつくりなんてしてられないのに。それなのに、遠

征でしばらく離れ離れになつてしまうなんて：」

「：花」

珍しく素直に心情を吐露する花に、玄徳は回した腕

を強めた。

「でも、玄徳さんの奥さんになつたんだからそれ位我

慢しなくちゃつて、そう思つて：」

花の瞳には透明な雫が盛り上がつていて、既に決壊

寸前だつた。

「すまない、お前が余りにも聞き分けが良すぎてな」

そう言つて玄徳が花の目元に唇を寄せると、その拍

子に涙も零れ落ちた。

そのまま涙を唇で拭いながら、額に頬にと優しい口

づけを降らせていく。

「玄徳さん：」

とろんと潤んだ瞳で見つめられれば、玄徳の心拍数

も否応無しに高まつていく。その心のままに柔らかな

肌に触れたいと、花の夜着の袷に手をかけると、やん

わりとその手を阻まれた。

まさかここで拒まれるのかと心配したのも束の間、

花は赤く染まつた頬をさらに染めて玄徳からついと視

線を逸らした。

「あの、その、ここじゃ：」

恥ずかしいです：、と聞こえるか聞こえないか位の

囁きが玄徳の耳に届いた。

いまだに、寝台以外で肌を重ねる事に抵抗のある花

に、玄徳は気付かれないように苦笑した。夫婦の私室

にずかずかと入つてくるような命知らずな者など、こ

こにいる訳がないのだから、寝台でなければいけない

理由などどこにもないと言ふのに、だ。

もう両手では足りない位に肌を合わせていると言ふ